「さしものづくり」における単位架構の集合による 軸組架構と空間構成の変化過程

石川県鹿西町周辺の木造住宅における架構法の継承に関する研究 その2

THE PROCESS OF TRANSFORMATION OF MAIN FRAME AND SPATIAL ORGANIZATION IN "SASHIMONO-ZUKURI" FOCUSING ON THE COMPOSITION OF UNIT FRAMES

Research on the framing method of timber houses at Rokuseicho,
Ishikawa prefecture Part 2

堀江 亨*, 茶谷正洋**, 八木幸二***, 五十幡直子****

Tooru HORIE, Masahiro CHATANI, Koji YAGI and Naoko ISOHATA

The purpose of this research is to clarify the process of transformation in framing of the traditional timber houses in the area of Rokuseicho, Ishikawa prefecture. Analyzing the vertical and the horizontal sections of the local framing system called "Sashimono-zukuri", the composition of unit frames indicates that the beams called "Sashimono" have been playing major role to make the main frame rigid horizontally, and the "Sashimono-zukuri" of "Chanoma" has been maintained as the core of the main frame. The arrangement of horizontal elements has been changed in various patterns to enable the space to expand both horizontally and vertically.

Keywords : main frame, unit frame, vertical section of frame, horizontal section of frame, spatial organization, process of transformation

軸組, 単位架構, 垂直構面, 水平構面, 空間構成, 変化過程

1. はじめに

本研究は、石川県鹿西町周辺¹⁾における木造軸組住宅の架構法の継承される過程を、架構に用いられる水平材の位置、構成、機能の観点から、空間構成および屋根形式の変化との関係において考察するものである。調査対象は、鹿西町周辺において、丸太を太鼓にした「さしもの」²⁾と称する梁材に特徴づけられた架構を持つ住宅とする。

前編³⁾では、架構の構成上の核となっている「茶の間」⁴⁾の「さしものづくり」⁵⁾をとりあげ、「さしもの」およびこれを支持する水平材の配置構成と表現形式の変化から、単体の架構における部材と空間構成の関係を論じた。

本編では、分析範囲を^{ジョウヤ}上屋⁶⁾の軸組全体に拡張し、軸組を「さしもの」により区画された単位架構の集合としてとらえ、単位架構回りの見えがかりの⁷⁾側面の部材構成と、内部に組まれる梁組の構成に着目し、前者を垂直構面、後者を水平構面と定め、これらの構面の構成から、軸組架構と空間構成の変化過程を分析する。

分析対象数は、前編で扱った39棟のうち、竣工年次が不祥のもの3棟、および「茶の間」以外の部分を調査できなかった1棟を除いたうえ、追加調査による2棟と、架構、平面構成ともに鹿西町周辺と類似すると考えられる中島町の座主家住宅1棟の計3棟を加え、江戸中期より昭和60年までに建てられた38棟とする。分析資料は、座主家住宅については、文献3)より、他はすべて実測

* 日本銀行文書局管財課・修士(工学)

** 東京工業大学工学部建築学科 教授・博士(工学)

*** 東京工業大学工学部建築学科 助教授・博士(工学)

**** 東京工業大学工学部建築学科 事務補佐

Premises Management Division, Administration Dept., Bank of Japan, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Technology

調査⁸⁾により採取したものである⁹⁾。

2. 平面構成と架構の概要

調査住宅の平面は、図-1の破線で示す範囲の上屋が、原則として「茶の間」を中心とする6室により構成されており、「にわ」に面し、上屋の長辺側に主な入口がとられる。なお、現地の呼称に従い、平面構成における方位を、「茶の間」と主な入口との位置関係から、図-1に示すように、下手、上手、表、裏手と呼ぶことにする。

図-2に、文献4)における能登地方の平面型の分類¹⁰⁾と、本研究の調査住宅の上屋における平面型との対応を、主な入口が右下になるように整理して示し、また各型の[]内に、該当する調査住宅の棟数を付記した。文献4)の能登Ⅰ型¹¹⁾に対応する、「勝手」が「にわ」(土間)へ張り出しているもののうち、張り出しが上屋境¹²⁾まで達しているものをⅠ、達していないものをⅠ'とした。また、文献4)の能登Ⅱ型¹¹⁾に対応する、「にわ」が裏手まで同じ幅で伸びているものをⅡとした。文献4)の能登Ⅲ型¹¹⁾に対応する事例はなかった。また、Ⅰ、Ⅰ'、Ⅱとは別に、Ⅳのように、「にわ」がなく、当初から廊下を設けているものが見られた。なお、図中Ⅰ～Ⅳにおいて、「茶の間」、「寝間」の通りが欠落しているものをⅠ⁻、Ⅳ⁻に、また、「仏間」、「寝間」、「勝手」の裏手に部屋がさらに一列加わっているものをⅠ⁺、Ⅱ⁺に¹³⁾各々区別して示した。年代的にはⅠ'、Ⅱが先行し、Ⅰは明治末期頃から、また、Ⅰ⁻、Ⅰ⁺、Ⅱ⁺は昭和期に現れている。Ⅳ、Ⅳ⁻は昭和50年代以降に現れている。

図-3に、図-2のⅠの平面型に対応する軸組架構の例を示した。この図のように「さしもの」を十、丰、丰、丰などの形状に組んだ「さしもの組み」¹⁴⁾および一、=などの形状に並置した「さしもの」(これらを併せ、以下、「さしものによる梁組」と呼ぶ)による単位架構が、図-2の各平面型においても、図中の太い破線を境界として、おおむね部屋割りに対応して配置されている¹⁵⁾。ただし、「さしもの」のかかる高さは各单位架構で異なっており、図-3の「茶の間」、「にわ」、「勝手」の上部のように、胴差回り¹⁶⁾と桁回り¹⁷⁾の中間の高さ(以下、軸組中層と呼ぶ)にかかる場合と、図-3の「座敷」、「仏間」、「寝間」の上部のように、桁回りの高さにかかる場合がある。また、これらとは別に一部の単位架構では「さしもの」がかからない場合もある。

軸組中層にかかる「さしものによる梁組」の材端は、図-3における「茶の間」の表側のように、部屋境に立つ中間柱にはぞ差しにする場合と、「勝手」の下手側のように、「ひらもの」(現地の呼称で差鴨居のこと)に束立てして受ける場合と、「にわ」の下手側のように、部屋境に配された「さしもの」に束立てして受ける場合がある。また、桁回りにかかる「さしものによる梁組」は、

図-1 調査住宅平面図(室谷巖家、昭和6年竣工)

「石川県の民家」(文献4)による分類	本研究の調査住宅にみられた平面型	
	基本型	変化型
能登Ⅰ型 座敷 寝間 カッテ 座敷 ヒロマ 土間 (オエ) (チャノマ)	Ⅰ 「仏間」「寝間」「勝手」 「座敷」「茶の間」「にわ」 [8]	Ⅰ ⁻ 「仏間」「勝手」 「座敷」「にわ」 [1] Ⅰ ⁺ 和室 和室 和室 「仏間」「寝間」「勝手」 「座敷」「茶の間」「にわ」 [2]
能登Ⅱ型 座敷 寝間 カッテ 座敷 ヒロマ 土間	Ⅰ' 「仏間」「寝間」「勝手」 「座敷」「茶の間」「にわ」 [11]	なし
能登Ⅲ型 ナンド リョウノマ ダイ 座敷 チャノマ ドコロ 座敷 座敷 土間	Ⅱ 「仏間」「寝間」「勝手」「にわ」 「座敷」「茶の間」 [10]	Ⅱ ⁺ 和室 和室 洋室 「仏間」「勝手」「にわ」 「座敷」「茶の間」 [1]
分類外 (土間なし)	Ⅳ 「仏間」「寝間」「勝手」 「座敷」「茶の間」 和室 [3]	Ⅳ ⁻ 「仏間」「寝間」「勝手」 「座敷」 和室 [2]
小計	[32]	[6]
計	[38]	

— 間取りの境界 — 「さしもの」による梁組の境界
▲ 主な入口 ■ 廊下
各型の[]内は該当する棟数

図-2 上屋の平面構成の概要

桁または部屋境の「さしもの」が直接受けている。

図—4 に図—3 の架構の断面図を示した。「茶の間」には、「あま」(小屋裏) 下面まで吹き抜ける空間に、「さしもの組み」を中心とした、柱、束、貫などにより構成される井楼型の架構を見せており、これが現地では「さしものづくり」と呼ばれ¹⁸⁾、全体架構の中心になっている。「にわ」の架構においても、「茶の間」と同様に天井が張られず、部屋の中空に「さしもの」を見せている¹⁹⁾。図—4 の「茶の間」、「にわ」の上部には、桁回りに「帯引組み」と呼ばれる、角材の梁と根太を組み合わせた梁組がかり(図—12 参照)、「あま」の空間利用を可能にしている。一方、図—4 の「座敷」の上部には、桁回りに「さしもの」がかかるため、「あま」としては利用できないが、胴差回りに「帯引組み」が入り、2 階として居室を得ている。

このように、軸組は「さしものによる梁組」に区切られた単位架構の集合として成り立っているが、「さしもの」のかかる高さとその支持方法の違い、および「帯引組み」の入る高さにより、単位架構の構成は異なっている。

3. 分析の手順

図—5 に示すように、単位架構の部材構成を垂直面と水平面とに分け、四周に立ち上がる見えがかりの柱または水平材により成り立つ構面を垂直構面と呼び、「さしものによる梁組」、「帯引組み」などの梁組を水平構面と呼ぶことにする。なお、隣接する単位架構の境界の垂直構面については、図—5 における単位架構 A、B 各々の内部からの見えがかりが異なる場合がある。これらを区別するために、単位架構 A、B が接する部分の垂直構面を見えがかりの構成として、a、b に分けて考えるものとする。

本編では、垂直構面において、「さしもの」を支持する部材の多寡により示される、面的に開かれた部分の割合を、開放度と呼び、垂直構面の開放度から、水平方向への空間の連続性を、また、水平構面の高さや配置構成から、垂直方向における上方への空間の増設の自由度を各々分析する。

分析の手順として、まず、「さしものによる梁組」を軸組中層に持つ単位架構により構成される 31 棟を取りあげ²⁰⁾、「さしもの」の支持方法により垂直構面を分類し、水平方向への空間の連続性の変化過程を示す。次に、全資料 38 棟について、水平構面が軸組に配置される高さや、2 階および小屋裏の空間構成との関係から、垂直方向における空間の増減過程を示す²¹⁾。最後に、2 つの分析を総合して、架構形式の変化を考察する。

4. 垂直構面による分析

(1) 分析方法

軸組中層に「さしもの」を持つ単位架構について、図

図—3 上屋軸組架構と平面構成の対応 (室谷巖家)

図—4 調査住宅断面図 (室谷巖家)

図—5 垂直構面、水平構面

—6に、「さしものによる梁組」を支持する方法とその部材構成の見えがかりにより、垂直構面をa～dに分類した。なお、図—6の姿図で小壁下端の点線は、内法高さを示す。この高さには鴨居が取り付けられる場合もあるが、構面の分類では「さしものによる梁組」の支持部材に視点を当てているので、これに該当しない鴨居は省略した。

aは、中間柱を立て、「さしもの」の材端を柱にほぼ差しとする方法である。ただし、中間柱のみが入るa₁のほかに、a₂のように、「さしもの」が中間柱で支持され、かつ小壁下端に「ひらもの」が入っているものや、a₃のように、複数の「さしもの」のうち、一方が中間柱で、他方が「ひらもの」や部屋境の「さしもの」で支持されているものが考えられるが、いずれも中間柱が存在し、内法部分の開放度を減じていることから、aとして扱った。bは、胴差回りの高さの「ひらもの」から束立てして受ける方法である。cは、「さしものによる梁組」と同程度の高さに部屋境の「さしもの」を入れて受ける方法であり、同程度の高さの角材であってもよいものとする。なお、図—3の「にわ」の下手側のように、「さしものによる梁組」よりも若干低い高さに、部屋境の「さしもの」を配し、束立てをしていても、これが「ひらもの」の位置する高さよりも高い場合にはcに含めるものとする。また、一構面に「ひらもの」と部屋境の「さしもの」が共存する場合は、図中にb+cとして示した。dは、構面の見えがかりに支持部材の無い場合である。図中、d₁は、当該構面の裏側の構面が「さしもの」を受けているために、支持部材が構面の見えがかりに現れないもの、d₂は、当該構面が、「さしもの」の材端を受けず、支持部材の無い場合である。前者の形式については分析結果で詳述する。

図—6の各構面の開放度の大小を比較すると、まずaは、b、c、dに比べ、中間柱があることにより、内法部分の開放度が小さいことから、a<b、c、dであるといえる。次に、bとcを比べると、cにおいて小壁を除いても、「さしもの組み」を支持する架構は維持される、すなわち部屋境の「さしもの」より下部を開けることができる。これに対して、bでは、「ひらもの」が障害になって内法高さ以上の部分を開けることができない。ゆえに、開放度はb<cとなる。また、b、cとdを比べると、dのうち、当該構面の裏側に支持部材がある場合、構造的な開放度は、b、cと同等であるが、当該構面にあるべき部材を、構法的な工夫により、見えがかりのうえで無くしていることは、構法的な意味での開放度の増加であると考えられるので、b、c<dとなる。ゆえに、見えがかりの構法的な意味で、開放度の順位づけは、a<b<c<dであると考えられる。なお、b+cは、開放度においてbと同等であると考えられる。

図—6の最右列にはa、b、c、b+c、dを簡略図で表示

した。

次に、図—6の分類に従い、単体の架構における垂直構面を図—7のように伏図上に簡略表示する。これにより記号化した単位架構の集合を、図—8のように、主な入口が右下となるように対称変換し、平面構成と対応させたうえで、図—9に模式的に表現する。図—9の縦軸は竣工年次を示し、横方向には、「茶の間」の「さしもの組み」が、中間柱に支持される構面の数が少ないものほど右方となるように配列した。なお、図—8、9において、実線の枠で囲まれた部分が、「さしものによる梁組」の入っている単位架構を示し、それ以外の部分は上屋の境界を破線で結んだ。また、図—9において、実線の枠で囲まれた部分のうち、網かけをしたものは、「茶の間」以外の単位架構で、「ひらもの」が用いられているもの、斜線を施したものは、「茶の間」以外の単位架構で、垂直構面の部材構成が、当該構面の裏側にあたる隣室の構面とは異なっているものである。

主な支持部材	記号	姿図		簡略図
		「さしもの」を1本受ける構面	「さしもの」を2本受ける構面	
中間柱	a ₁			
	a ₂			
	a ₃			
「ひらもの」	b			
部屋境の「さしもの」	c			
「ひらもの」+部屋境の「さしもの」	b+c			
構面に支持部材なし	d ₁			
	d			
	d ₂			

* 分類としてはあるが、調査事例にはなかったもの

図—6 垂直構面の分類

図—7 垂直構面の表示

図—8 平面と垂直構面表示の対応

(2) 分析結果

図-9を、「茶の間」と周囲の架構との対比を主眼に、垂直構面における中間柱の省略と、水平材の補填との関係から分析する。

まず図-9を、「さしものによる梁組」が入っている単位架構の占める領域から見ると、「茶の間」の架構を残しながら、単位架構の数が経年的に次第に減少する傾向が見られる。なかでも「寝間」の上部には、江戸中期の数例を除き、すべての事例で「さしものによる梁組」が入らない。そこで以下、「茶の間」を中心に、「にわ」、「勝手」を「にわ回り」、「座敷」、「仏間」を「座敷回り」と呼び、これらのブロックごとに変化を述べることにする。

図-9を、垂直構面の種類から見れば、経年的におおむね「茶の間」の四周の中間柱が省略されるとともに、周囲の架構も中間柱を省き、水平材を入れるようになる

図-9 垂直構面表示による軸組の変化過程

傾向が見られる。

「茶の間」の四周に中間柱が入るものは、明治期以前に見られ、この場合、同様に周囲の架構にも外周に中間柱が入る。これを、図-10の①に模式的に示す。一部で柱が省かれ、水平材の入る箇所があるが、「ひらもの」はほとんど使用されていない。

次に、図-9の「茶の間」における中間柱の入る構面数が3, 2, 1のものについて見ると、江戸末期頃から、「茶の間」の下手側に「ひらもの」が入っており、これに伴い、「にわ回り」の随所に「ひらもの」が入り、「勝手」および下屋との間を開放的にしている。それ以降も、「にわ回り」の「ひらもの」の増加傾向は、おおむね「茶の間」の傾向に準じている。これに対して、「座敷回り」では、「ひらもの」はほとんど用いられておらず、明治期になって「茶の間」の上手側に入るようになった「ひらもの」が、「座敷」の下手側に見えているだけである。

図-10 垂直構面の変化の概念図

これを、図一10の②に模式的に示す。明治後期以降になると、「座敷」の構面に「ひらもの」を見せないように、「ひらもの」の断面を「茶の間」側だけの半分とし（このような手法を現地では「かたふた」²²⁾と呼んでいる）、「座敷回り」の見えがかりから「ひらもの」を排除しようとする傾向が表れてくる。これを、図一10の③に模式的に示す。ただし、この図では「さしもの」を支持する部材として構面を表現しているため、「さしもの」の支持に関係しない鴨居、長押は省略した。なお、図一10で「かたふた」の部分は断面を黒塗りした。

最後に、図一9の「茶の間」の構面に中間柱が用いられていないものは、大正期以降に現れており、「座敷回り」、「にわ回り」に共通して、構面のほとんどが水平材で満たされている。「茶の間」と「にわ回り」では「ひらもの」が、「座敷回り」では部屋境の「さしもの」が主に使われ、部屋のブロックごとに水平材の選択性が顕著になってきている。特に、「茶の間」と「座敷」の境では、同一構面の表裏で「ひらもの」と部屋境の「さしもの」をともに「かたふた」とし、「座敷」には「茶の間」側の「ひらもの」を、「茶の間」には「座敷」側の部屋境の「さしもの」を、各々見せないようにしているものが現れている。これを、図一10の④に模式的に示す。

このように、「さしものによる梁組」を支持する垂直構面は、「茶の間」と「にわ回り」、「座敷回り」とで各々異なった変化が見られる。「にわ回り」においては、「さしもの」が入っていれば「茶の間」と同様の過程を経るが、「寝間」上部のように「さしもの」が入らず2階を設けているものが「座敷回り」に先行して現れており、空間の枠組が上下に分割されやすい傾向をもつ。一方、「座敷回り」では、「茶の間」との境界の水平材を「かたふた」により二重化し、部屋の意匠と架構を独立させようとする傾向が見られる。

以上から、軸組架構は、単位架構が空間の開放性を拘束し部材構成がどの区画も一様であった形式の年代から、各区画間の水平方向への連続性が強まった形式の年代へ移行し、ついで、各室内空間の個別性を表現する部材構成の年代へ移行するといえる。

5. 水平構面による分析

(1) 架構区分、層区分の定義

軸組架構における水平材の位置を表現するために、水平方向、垂直方向各々に以下のような区分を設定する。

図一11に示すように、上屋軸組について柱割りと梁組のかかり方から水平方向に区分けを行い、架構区分とする²³⁾。架構区分は、「茶の間」に対して主な入口が右下となるように対称変換したのち、「茶の間」の位置をiとして、左回りにii, iii, ..., viのように番付けする。なお、小規模な住宅で4架構区分しか持たない事例²⁴⁾は、

部屋名称などから、6架構区分の一部が欠落した形であると見なし、図一11のaのように番付けする。また、架構区分i, iiの裏側で3区分され、7架構区分をもつ事例²⁵⁾は、図一11のbのように番付けし、7区分とも分析対象とした。大規模な住宅で9架構区分をもつ事例²⁶⁾は、部屋名称などから、6架構区分の裏手に一列加えた構成であると見なし、図一11のcのように番付けし、9区分とも分析対象とした。なお、「茶の間」が無く、主な入口が中央にあるもの²⁷⁾についても、「座敷」、「仏間」の位置から他の例と照合し、分析対象に含めた。

垂直方向には胴差回り、軸組中層、および桁回りの各レベルを設定し、層区分とする²⁸⁾。

(2) 分析方法

図一12のように、水平構面を4種に分類する。図中、「さしもの」は、「さしもの」が組まれず、片方向のみにかかっているものとする。また、「構造材なし」の項目には、竿縁天井などの化粧天井も含めるものとする。図一12に従って各区画を表し、図一13のように架構区分を水平構面の層構成として表示する。

調査住宅を架構区分ごとに照合した結果、図一14に示す8種類の層構成が抽出された。これらを分類する指標として、水平構面における「さしもの組み」の有無とその高さに注目する。まず、旧来からの「茶の間」の架構と同型の、「さしもの組み」を軸組中層に配した「さしものづくり」の有無を、次に、層区分の高さを問わず「さしもの組み」の有無を、さらに、片方向のみにかかる「さしもの」の有無を、順次指標とし、x, y, z, uに分類し、さらに、「さしもの組み」と「帯引組み」の

図一11 架構区分、層区分

	「さしもの組み」	「さしもの」	「帯引組み」	構造材なし
姿図				
表示				

図一12 水平構面の分類

ていく発展過程を踏まえ、1) を 2) の先行型と見なし、1) を C 型、2) を D 型とする。

以上のように、軸組架構全体において、図—14、15 の A から D に向かい、「さしもの」のかかる高さが「茶の間」をとりまく架構区分から段階的に上昇する傾向としてとらえることができる。そして、このような架構の変化は、空間構成における「あま」空間の減少と 2 階の増加に対応しているといえる。

6. 考 察

垂直構面による分析において、単位架構と空間との一様な対応から、単位架構がその部材構成に内部空間の個性性を表していく過程は、「さしもの」のかかる高さから、水平構面による分析において、「さしもの」が軸組中層

に残りながら、次第に桁回りにとりついてゆく過程（図—14、15 の A→B→C）に相当する。一方、水平構面による分析における最終型である、すべての「さしもの」が桁回りにかかる総 2 階建の形式（図—14、15 の D）は、各部分が均等な架構により成り立ち、かつ胴差回りと桁回りに各々入った水平材により、1、2 階ともに水平方向に空間を開放することが可能である。このように、閉鎖的で等質な単位架構の集合から、室外へは開放的であるが室内の個性性が強調されるような架構へ変化したのち、最大限に空間利用の可能なゆえにどの部分も等質な総 2 階建の架構へ移行したことは、架構の均質性においては旧型に回帰したと見ることができる。

これらの変化を梁材の配置から見れば、「さしもの」のかかる高さが、軸組中層から桁回りへ変わるとともに、「茶の間」に代表されるような、単位架構の中空に「さしもの」を見せる配置から、小屋組との境界面へ隠蔽する配置へ転換しながら、すべての水平構面を「さしもの」で固めようとする傾向は存続している。これは、「さしものによる梁組」のもつ吹き抜けの空間の意匠的な効果を重んずるか、2 階居室を増すなどの実利を求めるかの選択の過程としてとらえることもできる。

また、「茶の間」の架構としての中心性から見れば、昭和後期に現れている総 2 階建は、「さしものづくり」を容れる余地が無いため、平面上「茶の間」を設けていても、その架構としての中心性が失われているが、同時期に、回りを 2 階建の架構にとり囲まれながら、「茶の間」だけが「さしものづくり」の架構になっているものが現れており、旧来からの軸組架構における「茶の間」の「さしものづくり」の中心性が保持されているといえる。

7. まとめ

本編では、石川県鹿西町周辺の「さしものづくり」による木造住宅において、架構の構成要素として垂直構面、水平構面を設定することにより、軸組の構成を単位架構ごとに特徴づけ、それらの集合により架構と空間構成の関係を系統的に表現した。

その結果、軸組架構を「さしもの」を用いた梁組で水平方向に固め、「茶の間」の「さしものづくり」の中心性を保持しようとしながら、空間との関係においては、水平方向へは空間を拡張しうる、垂直方向へは空間を増設しうるように、水平材の位置、構成が変化してゆく過程を示すことができた。

今後は、「さしもの」と桁回りの部材構成との関係から、軸組と小屋組の関係を分析する予定である。

注

- 1) 鹿西町の能登部下、徳丸、能登部上、西馬場の 4 地区を中心に、羽咋、七尾、鹿島、高浜などの周辺地域を調査

対象とした。

- 2) 本研究の「さしもの」は、文献1)の「差しもん」：②の『石川県能登地方の民家において、茅葺き屋根の小屋梁を示す呼称』に相当する。ただし、地元の大工、住民が、部材の形状から「さしもの」(丸太を太鼓にしたもの)と「帯引もの」(角材)とを呼び分け、また、丸太を太鼓にした梁材を、その配される高さにかかわらず「さしもの」と呼んでいることから、本研究では、この呼称を小屋梁としての機能に限定せず、部材の形状から「丸太を太鼓にした梁材」と定義し、そのうえでこの梁の架構における位置、構成、機能を考察するものである。
- 3) 文献2)。
- 4) 部屋名称は現地の呼称に従った。文献2)の注8)を参照。
- 5) 「さしもの」を用いた梁組を中心とする、柱、差鴨居、束、貫などにより構成される井楼形の架構を指し、これが軸組架構の単位になっている。なお、石川県および富山県におけるこれに類する架構の呼称については、文献2)の注7)を参照。
- 6) 文献1)によれば、上屋は、『合掌や小屋梁を支えている主体構造を指す呼称』とある。本研究では、軸組を梁組のかかり方から単位架構に分けて考え、小屋組を受けている単位架構の占める範囲を上屋と定義する。また、その外側の部分を下屋と見なす。
- 7) 壁または小壁内部にあって隠蔽されている部材については、本研究の対象外とする。
- 8) 実測調査については、昭和59年度文部省科学研究費総合A(代表・内田祥哉)により行ったものに、筆者らの追加調査により、資料を加えたものである。
- 9) 実測調査を行った住宅のうち、梅木久史家および宮崎国男家の2棟は、竣工後に「勝手」と「にわ」の境界において、中間柱を除去し、「ひらもの」(差鴨居)を入れた形跡があった。これらについては、改修前の架構を分析資料とした。
- 10) 図-2に示した略平面図は、文献4) pp. 4~5の記述から、筆者が模式化したものである。
- 11) 文献4) pp. 4~5を参照。
- 12) 平面上の上屋と下屋の境。
- 13) 図-2のⅠ⁺、Ⅱ⁺は、表裏方向に3列の室構成である点において、文献4)の能登Ⅲ型に似ているが、「茶の間」を取り囲む「座敷」の配置や、炉の切ってある部屋の位置などから、Ⅰ⁺、Ⅱ⁺は、能登Ⅰ、Ⅱ型の変化型であると見なした。
- 14) 文献2) p. 62において定義。
- 15) なお、一部の住宅で新築後に、「勝手」が「にわ」側に拡張し、平面型が図-2のⅡからⅠ、Ⅰ'に変化したものがあり、この場合、現状では平面構成と単位架構に喰い違いが生じている(注9)参照)。また、Ⅰ'において「にわ」の裏手側と「勝手」にまたがって1単位架構を成し、架構の境界としてはⅠと同形になっているもの(6棟)があった。
- 16) 文献2)の注4)を参照。
- 17) 文献2)の注6)を参照。
- 18) このような井楼型の単位架構を、文献2)では、現地の呼称に従い、「さしものづくり」と定義した(文献2)の注7)参照)が、本編ではこれを狭義の「さしものづくり」

と解釈し、「さしもの」により構成される家屋全体の架構を広義の「さしものづくり」として解釈しなおすものとする。

- 19) 「にわ」の上部には、竣工後に軸組中層の「さしもの」の下方に化粧天井が張られる例が多く見られた。一方、「茶の間」の上部には現在でも天井を張らず、「さしもの」を見せているものがほとんどである。
- 20) 残る7棟については、「さしもの」がすべて桁回りにかかっており、「さしもの」を支持するために垂直構面の構成部材が水平方向への空間の開放度を制限することがないと考え、分析対象から除外した。
- 21) この水平構面による分析は、拙稿・文献5)および6)において用いた方法をもとに、分析資料数を追加し、分析方法を見直して改筆したものである。
- 22) 文献2) pp. 64~65を参照。
- 23) 本研究において、「単位架構」は、立体的な架構そのものを表し、「架構区分」は、単位架構の配置による平面上の区分を示す。
- 24) 図-2のⅠ⁻に相当する1棟。
- 25) 図-2のⅠ'に相当する11棟のうち、「勝手」と「にわ」の裏手側部分の架構が分かれている5棟。なお、残る6棟は、注15)に示すように、Ⅰと同形の6架構区分であった。
- 26) 図-2のⅠ⁺、Ⅱ⁺に相当する3棟。
- 27) 図-2のⅣ⁻に相当する2棟。
- 28) 大規模な住宅において、小屋組を直接受ける高さに回る桁のほか、軸組中層の「さしもの」のかかる高さの上屋外周に桁を回し、桁のかかる高さが二重になる形式が見られた。この場合には、文献2)の注6)に従い、小屋組を受ける桁の高さを桁回りと見なすものとする。なお、桁、小屋梁、小屋組の位置関係については次編において分析する予定である。

参考文献

- 1) 日本建築学会民家語彙集録部会編：日本民家語彙集解，1985.10
- 2) 堀江 亨，茶谷正洋，八木幸二：「さしものづくり」における架構と空間構成の変化過程，石川県鹿西町周辺の木造住宅における架構法の継承に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文報告集，第432号，pp. 61~68，1992.2
- 3) 財団法人文化財建造物保存技術協会編：重要文化財座主家住宅修理工事報告書，1974.11
- 4) 石川県教育委員会編：石川県の民家，1973.3
- 5) 茶谷正洋，八木幸二，堀江 亨ほか2名：能登地方における木造住宅の総合的調査研究 その6，架構法の変遷，日本建築学会北陸支部研究講演梗概集，pp. 249~252，1986.6
- 6) 茶谷正洋，八木幸二，堀江 亨ほか2名：石川県鹿西町周辺における木造住宅の架構法の変化について(その1) 一能登地方における木造住宅の総合的調査研究一，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp. 579~580，1986.8

(1992年3月9日原稿受理，1992年7月16日採用決定)